

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成 27 年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日時： 平成 28 年 9 月 24 日（土）14：00～15：40

場所： 杏林大学 三鷹キャンパス 本部棟 11 階 貴賓室

評価委員： 委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）
委員 鈴木 栄氏（湘南工科大学 教授）
委員 藤井達也氏（埼玉県立伊奈学園総合高等学校 教諭）

杏林大学参加者： 跡見 裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、
稲垣大輔高大接続推進室長、黒田幸司部長、
青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。
個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】

平成 27 年度の事業は、前年度からの学内基盤構築・関連施設設置、新たな人員配置等の基盤が整備され、計画に沿い各事業項目が順調に進展した点は評価できる。

文部科学省も高校教育の改革・入試改革・大学教育の改革の三位一体の高大接続改革を進めている最中であり、杏林大学の全学的グローバル教育推進の中に位置づけられた高大接続事業であるが、高校と大学の教育の接続が、高校側と大学側の意見交換をもとに、いろいろなイベントを通して高校生や大学生に還元され実施されており、高大接続に寄与している。

中国との関係は政治的には芳しくないが、言語が国際関係に大きな影響を与えることは歴史の中に現れている。こうした中、日英中トライリンガルの育成は経済的側面のみならず、平和構築にも寄与する教育目標であると思われる。

ライティングセンターや日英中トライリンガルキャンプでのピアチューターの活動は、大学生にも主体的に多様な人と活動する機会を与えている。大学側が IELTS 対策講座や前述の教育機会を高校側に提供することは、高校としては非常にありがたいであろう。さらに、AP ラウンドテーブルや高校教員と大学教職員の参加する FD/SD 等も含め、高等学校と杏林大学の相互方向の交流・意見交換が拡大し深まりを見せている点は評価できる。

ただ、活動が英語系に偏っている感があるので、ライティングセンターでの中国語の指導なども試みられると良い。英語圏の学生との交流機会はあるが、中国の提携大学や留学生との連携企画も期待したい。そして各種の教育イベントにおいて、参加した高校生や大学生が自らの学習成果を残すレポート等を作ることが大切である。これはポートフォリオの作成にもつながる。同様にルーブリックによる自己評価を高校生や大学生が行うことで改善が進み、より高度なプログラムへの発展が期待できる。

また、外国語ができることが将来の職業や生き方にどのように繋がるのか、「将来のビジョン」を描ける講演や卒業生の話などを行うことで、生徒や学生がロールモデルを持つことができよう。

アドバンストプレイズメントの会議も開かれ、今後は期待できる。

言語能力のルーブリックのレベルが CEFR 基準の B2 レベルで終わっているようなので、グローバル人材を目指す教育であるならば C1 レベルを目指すことも必要かもしれない。言葉は思考力と結びつくので、クリティカルシンキング、クリエイティブシンキングの育成がグローバル人材としては重要である。アジアの大学の中には英語のみで卒業できる大学もあり、留学生が日本を選ぶかどうかは、今後の日本の大学全体の問題でもある。

【評価のまとめ】

平成 27 年度事業は前年度に比べ広がりや深まりを見せており、他大学および高校の 3 つのポリシーデザインに対しロールモデルとなることが期待できる。AP ラウンドテーブルは高校関係者、大学関係者にとって改革への一つの大きなリソースとなりえると感じる。今後、一層の高みを目指すことが期待される。

【添付資料】

第三者評価書 3 通

- ・平方邦行委員長
- ・鈴木 栄委員
- ・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】

- ・平成 27 年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成 27 年度
- ・平成 28 年度大学教育再生戦略推進費 大学教育再生加速プログラム（AP）
「高大接続改革推進事業」計画調書

以上

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 27 年度事業実績

評価者：所属：工学院大学附属中学校・高等学校 校長
氏名：平方 邦行

総評：2020 年大学入試改革の眼目である、2030 年以降のイノベーションにおける産学ギャップを埋めるための高大接続システムの試みとして、貴校の AP の一環としての「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の試みは、他大学及び高校の 3 つのポリシーデザインに対し、重要なロールモデルとなるでしょう。

また、ラウンドテーブルによる多様な教育機関とのネットワークは、参加者にとって重要な社会資本になり、イノベーション実現への大きな 1 つのリソースになることでしょう。

そして、今回の試みの目標でもある「グローバル人材」育成という新たな人材資本の形成に寄与する試みであると思います。社会資本、人材資本の土壌が、高大接続によって、形成されることが、世界同時的デフレ状況を脱却する使命を引き受けたグローバル人材が輩出される契機となると確信しました。

改善すべき点：言語能力のルーブリックのレベルが C E F R 基準に対照すると、B 2 レベルで終わっているように思えます。ライティングも英語や中国語の B 2 レベルが目標だとすると、グローバル人材育成のアイテムにならない可能性があります。

というのも言語は思考力と結びつくのが欧米中心主義ではありますが、世界標準です。イギリスのファンデーションや米国の AP は、思考力のレベルは、クリティカルシンキングやクリエイティブシンキングまで要求します。インダストリー4.0 や第 4 次産業を見据えた S T E M 教育も、そこに挑戦しています。

今回の試みも、世界標準に合わせたルーブリックであることを議論してみてもいいのではないでしょうか。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 27 年度事業実績

評価者：所属：湘南工科大学
氏名：鈴木 栄

総評：

「日英中トライリンガルのための高大接続」事業は、大学の役割を地域貢献まで広げた取り組みであり、多様化する社会に対応するための画期的な取り組みであると思います。今後、日本は、アジアの国々との連携がますます必要になり、それに伴い、共通語としての英語学習に加えて、アジアの言語を1つ以上習得することは必須になってくると想像されます。アジアでの使用者がもっとも多いと思われる中国語を取り入れたことは先見の明のある選択であると思います。

言語が国際関係に大きな影響を与えることは、これまでの歴史の中に現れています。言語政策が国家に負の影響を与え、紛争が起こることも想定されます。日本は、近年、近隣国家との摩擦も多く、特に、中国や韓国との感情的なすれ違いも多く報道されています。そのような時に、大学で英語のみならず中国語も取り入れた「トリリンガル育成」を提唱し実践することは、非常に意義のあることであると考えます。貴学の本推進事業の目的には、「世界経済を中心に担っている英語圏・中国圏に伍する日本社会の未来を築く」と記され、経済的な側面を強調しておられますが、実は、言語を通して国家間の平和を構築することを目標とする教育政策とも言えると思います。教育の場で、言語教育をおこなうことは、その言語が使われている国々への敬意と関心があることに他なりません。本事業は、そうした国際理解・国際平和に貢献する試みであると確信いたします。

高校、近隣の大学との連携は、実現が難しく、実施している大学はそれほど多くはないと思います。多くの企画を実施することは、ご苦労が多いと思われませんが、貴大が、中心となり、高校・大学間の理解が深まることでしょう。

具体的な取り組みに対する総評：

「ライティングセンター」では、ピアチューターを取り入れています。非常によい試みであると思います。学生は、チューターとして教える中で自らも学ぶことができます。このようなライティングセンターは、中学校・高校でも設置をしたいところですが、なかなかできない現状があり、スカイプを使った大学でのセンターでの学習経験は、生徒の学習意欲を高める役割を果たすことと思います。

「海外協定大学との連携」による高校生とアメリカの大学生の交流は、国際交流がなかなか実現できない高校にとっては意義のあるプログラムであると思います。高校生の時に海外との繋がりを経験した生徒は、大学に入学した後も積極的に海外留学や海外との交流に参加するようになります。

「トライリンガルキャンプ」「IELTS 対策講座と試験実施」も、非常によい試みであると思います。こうした試みは、高校側ではなかなか実現することが難しいものであり、大学が提供するこ

とで、高校生に学ぶチャンス、人と出会うチャンス、試験などに挑戦するチャンスを与えることができます。

「アドバンス・プレイスメント」は、文部科学省専門職官が感想を述べているように、期待できるものです。意欲的な高校生に、大学での教育を前倒しで提供することは、高校生の学習意欲と学力を伸ばす機会になります。

「高校での講演」

大学側からの専門的な内容の講演や、高校側からの高校教育の情報提供など、様々な取り組みがされていることで、高大接続の目的を達成されていると思います。

「ルーブリック会議」では、高校生も参加し、意見を聴く場を設けているのは非常によい試みであると思います。学習者の意見を聴くことは重要です。

改善すべき点：

① 将来のビジョンを描くための企画

「高大接続」を目標に、高校から大学までの範囲で優れた企画がおこなわれています。また、「入り口（入学）から出口（卒業）までの質保証」を目標としてあげられています。卒業後の自分をなかなか描くことができない大学生も多く、また、高校生も、大学に入学することが第一の目標となっている場合が多いように感じます。早くから、将来に対する希望、自分が本当にしたいことを考える機会になる、様々な経験を持つことが重要です。本プログラムでは、そうした意味で、高校生や学生に、将来まで考えることができる貴重な経験を提供していると思います。

さらに、将来への展望、ビジョンを持つことができるような企画があると、高校生や大学生が、学びと将来を結ぶことができるのではないかと感じました。

中国語や英語ができることで、大学を卒業してからどのような仕事ができるのか、どのような可能性に挑戦できるのか、そうした「将来の自分のビジョン」を描けるような講座や活動を少し含めてはいかがでしょうか。大学の卒業生を招待して、実際に仕事をする上で、大学で学んだことがどのように役に立っているのか、あるいは、大学でどのようなことを学んでおけば社会に出て役に立つのが、など具体的な話をしてもらうこともいいでしょうし、「企業が求める英語力・語学力」について海外駐在の経験や、海外との企業連携などについて話をしてもらうこともよいかと思います。また、社会で働く先輩や、年上の人の話を聴くことで、「ロールモデル」を持つこともできると思います。

② 参加学生や高校の学習成果を残す企画

事業報告書とは別に、キャンプなどに参加した学生や生徒が、発表した内容やプロジェクト学習の内容を冊子などにまとめることができれば、高校生にとっては、AO入試の資料として役に立つと思います。簡単なもので、デザインなどを学生や高校生が作り上げることも学習になると思います。

③ 中国語キャンプ

英語に関しては、テキサスからの大学生との国際交流がおこなわれていますが、中国語に関しても、中国に提携大学があるようですので、同じような機会を作られるとよいかと思います。または、国内における国際交流として、横浜中華学院の生徒を招待する、あるいは、国内に留学している中国人学生を招待する、というような試みも効果的であると思います。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 27 年度事業実績

評価者：所属：埼玉県立伊奈学園総合高等学校
氏名：藤井達也

総評：

ここで改めて持ち出す必要もないことですが、教育活動というものはその努力が一朝一夕に目に見える形で結果となって現れるものではありません。しかし、努力をしなければ確実に次世代をより豊かに育てることは難しくなってしまうことでしょう。昨年の委員会の席上でもあったように、このAP事業の各種プログラムに参加した若者が社会に出た時、あるいはさらにその先でその成果を目にすることが期待できるものなのかもしれません。人間の成長というものは一つのことが原因で結果が現れるとは限らず、多くの場合は様々なものが絡み合い複合的に影響し合っ
て培われるものだと思われるからです。より効果が見込まれる教育デザインやプログラムを考えていくことは言うまでもなく大切なことです。しかし、人の資質の向上は特効薬のようなものに期待するのではなく、人間同士のインタラクティブな関わりの中で形成されていくものだと言えます。また、それは個人の質の向上だけでなく人間の集団、社会の質的变化と共にもたらされるものだと言えるかもしれません。

こういったことを考える時、本事業が今までの実績を元に高大の接続のための様々なプログラムを継続しさらによりよいものとすべく尽力してきたことは非常に評価すべきことと思われ
ます。「APラウンドテーブル」は回数を増やしながら参加校、参加教員を拡大してきました。高校の現場の声を聴きながらフィードバックすることは、とても意義のあることといえます。アドバンスドプレイスメントの理解は高大ともにまだまだ十分とは言えないのが現実であるか
もしれませんが、その理解を広げることのみを目的とせず、相互の教育現場の声を聞き、より多くの角度から理解を深めるために参加校・参加者を拡大させながら継続していくことが望まれます。今年
の2月には文科省の専門職の方や近隣の大学・高校関係者による「アドバンスド・プレイスメント・ラウンドテーブル」が開催され意見交換が行われたことは理解の深まりと広がり、社会認知を期待できる
ものです。

ITの普及にともないSNSを使うことはごく自然なこととなり人と人はネットワークでつな
がっているように見えます。その一方でつながっているのはやはり同じ世代や同じ好みを持つものに偏っている傾向は否めません。またそれらを使っていない世代とのつながりもありません。こ
ういったことから顔と顔をつきあわせて話し合ったり教えたり教わったりすることができる場があることはとても貴重なことと言えます。まさに、COCの理念として知の拠点として地の拠
点となっていくことが期待されます。

2015年8月に実施された「日英中トライリンガルキャンプ」では大学生の先輩たちのアドバイ

スを受けながらパワーポイントの資料を完成し、プレゼンテーションまでやり遂げることができて良かったという感想があったとのことですが、前述したような意味での本プログラムの存在価値が参加者の声にも反映されていると思われまます。

ライティングセミナーにおいても、“実際にレポートを書き始めるにあたって、どうやってトピックを絞るのか”ということに焦点を当て、ピア・チューターとともにリサーチによって得られる情報の正しい見分け方を、グループディスカッションを通して学ぶなど人との関わりを通して主体的に考えるよう企画されている点が素晴らしいと思います。

また、昨年の第三者評価委員会で話題に上ったプロジェクト方学習についてもこのキャンプで取り入れられており、「訪日外国人対象の旅行企画を考える」というテーマが与えられ、より主体的な思考が必要とされる形となっています。

今回、事業報告書を拝読して喜ばしいことと思われたのは、高大接続・高大連携が全学的に波及されつつあるということです。

経営学の出張講義では単発的な講義にとどまらず、その講義をもとに、参加高校生は実際マーケットリサーチを行い実際の社会貢献に参画していく意識を持つことは今後の学習意欲、社会参加意欲に大きく資することになると思われまます。またセミナーの前に高校教員と内容について意見交換を行っていることはとても重要であると思われまます。このような講義から生徒の継続的な活動へと発展していくプロセスは、他のプログラムにおいても、点から線、線から面へと広げていくことになると更に期待されまます。

また、順天高等学校生徒への保健学部での DNA 関連技術実習においては、講義や演習だけでなく、専門用語の英語の使い方・英語の指示の聞き取り練習も行われ、参加生徒からもメディカルイングリッシュに対する学習意欲が高まった感想もありまます。まさにこういった経験は、「英語学習のための英語学習」ではなく学びたい学問分野を開拓していくために必要な英語学習を意識させるものであるといえまます。科目の垣根を超えて総合的な学習の意義の示していただけたと感じまます。

今後も貴学の多面にわたるリソースを活用して、このような学際的で高校生の知を刺激し学習意欲をかき立てるプログラムをデザインしていただけることを期待しまます。

改善すべき点：

冒頭に述べたように本事業はこれまで実施してきたことをもとにして量的に質的に着実に発展してきております。改善すべき点と言うよりも、例えばライティングセミナーで得られた成果を中国語に生かすなどより複合的にプログラムを発展させていくことが望まれるのではないかと思ひまます。

ルーブリックによる自己評価を「日英中トライリンガルキャンプ」などのプログラムでも行い、参加者が次のキャンプでは改善を試み、更に高度なプログラムに主体的に取り組んでいくというような流れができれば素晴らしいと思ひまます。

本事業の今後の発展に期待をしております。